

# 社会福祉法人 幸生会 の設立と 諫早療育センター の出発点

## 創立十周年に寄せて

(『創立10周年記念 諫早療育センター記念誌』より)



理事長  
山田 幸儀

今までの私の歩みの中に思い出はいくつかありますが、私が障害者のことに関心を抱き始めたのは、昭和35年長崎県婦人児童課長に任命された時からでした。

ある朝出勤すると一通の封書が届いていました。差出人を確かめましたら、「障害児を持つ一母親より」とだけ書いてあり、そしてその手紙には次の事が記してありました。「私は障害児を持つ母親であります。この子の将来を考えると目の前が真暗になります。いっそ母子心中を凶ろうと一晩中鉄道線路をさ迷いましたが、ふと我にかえて、死んでみてもどうにもならないと思っておして、自分と同じような人が世の中には、まだまだ多くおられるはずだ、その人達と手をつないで国や県に、この子らの対策をもっともっと強化してもらおう、障害児といえどもかけがえのない人間である。過去、現在、未来に生きる尊い生命であると考えました。どうか新しい課長さん、この願いを理解して私達にかわって対策を進めて下さい。」とありお母さんの切々としたこの訴えに、私は痛く心を打たれました。「これは大変なことだが、俺はこの課長の椅子に着いたことを大切に思い、きっと障害児のためになんらかの対策をやろぞ」と決意しました。それ以来いつもこの母親の叫びは、私の心の中であって、むち打ってくれました。

この人にきく

## 私と重症児福祉

社会福祉法人 幸生会  
理事長 山田 幸儀

### ★一通の投書から

山田 私はもともと学校の教員で、現場で18年、その後指導主事を8年位やりました。それがたまたま教育に非常に熱心な佐藤勝也知事の時に、知事部局の企画部に新しく文化課が出来、その課長補佐に出向を命じられ、そこで、育児カレンダー（生まれてから学校へいくまでの子ども対象）というものを作りました。

この仕事をしたのをきっかけに、次に子どもに関係の深い婦人児童課長を命じられ、ここで障害児との関わりが始まりました。

私はだいたい定時には出勤する方なのですが、課長になって一週間目、8時30分に出勤すると、いつものように机の上に郵便物が配られていました。その中に、白い封書の投書があり、差し出し人は、「障害児を持つ一人の母親より」となっていました。開けて読んでみますと、こう書いてありました。

「私は、重症の子どもを持つ一人の母親です。この子どもが、将来自分達が死んだらどうなるのかということを見ると、目の前が真っ暗になります。ある時は、この子を抱いて、死のうかと思つて一晩中線路の上をさ迷ったこともありました。けれども、また我に返つて、死んでみたところで何になるだろう。世の中にはこういう人達もたくさんいるだろうと考えました。今度、新しい課長さんが見えになったということなので、一つ、是非、この子達のために新しい対策を考えて頂こうと思ひまして、お手紙を書きました。こういう子にも命があり、大事な人間なのですから、こういう人達のために、対策を講じて下さい。」

こういうことが、切々と書いてありました。

知事の部屋へ行つて、知事にその手紙を、「これを読んで下さい」とつきつけました。知事はそれを読まれて涙を見せられ、「君はこの仕事をやれ」と言われたのです。私は、「そのつもりで来ました。ですから、少なくとも5年は今のポストに置いて下さい。そうしたら私はやります」と、知事の前で私の決意を述べました。知事は「わかった、何とかする」と言われて、そこで約束したわけです。

そして、昭和52年、「重症心身障害児施設」（昭和53年＝1978年）建設に向けて「社会福祉法人幸生会」を設立。翌53年4月1日、橘湾を見下ろす自然豊かな有喜の地に50人定員の「諫早療育センター」が誕生しました。

